

じめたという知らせを伝えました。驚いた豊助は現場にかけつけました。ぬか
るみをふみながらたどりついた現場には、宗吉がぼうぜんと立ちすくんでいま
した。目の前には、去年きまねんの秋、みぞれの吹きつける中でかじかむ手に息をかけ
ながら、ようやく築きずきあげた土手どてがめちやめちやくずれおちています。雪ど
け水が音を立てて、その土や砂を下流におし流してしまいました。

「藩の金を無駄むだに使って何たるざまだ。」

「計算が少しうまいからといって得意とくいになっているから、ばちがあたったの
さ。」

「身のほども知らぬやつだよ。」

事故の知らせは、たちまち若松の町中に広がり、豊助を非難ひなんする声がまき起
こりました。近所の人たちでさえ、豊助の家の者どつき合わなくなり、親しい
人も町で会あうと顔をそむけてしまうようになりました。